IS〜インフィニット・ストラトス〜 流れに身を任せるマッドな男！

作者月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～インフィニット・ストラトス～　流れに身を任せるマッドな男！

【Ｎコード】
Ｎ９０９４Ｒ

【作者名】
作者月詠

【あらすじ】
『インフィニット・ストラトス』…本来女性のみが動かせられるパワードスーツ。しかし…それには『例外』が居た！？　片や、優秀な『ＩＳ操縦者』であった姉を持つ普通な少年…片や、『ＩＳの生みの親』に拾われた狂気科学者（マッドサイエンティスト）の卵の少年…　物語はどういう方向へ向かうのか！？

ＣＯＤＥ．００　到着の男（前書き）

ワァァァニング！

この小説は二次創作作品です！
キャラの設定や色んな部分がちょこっと違うので…お気をつけあれ！

イヤだぜ！という方は音速で『戻る』を押してください！

あ、ちなみに読み切りとは、ちょこっと改変してお送りします！

CODE．００　到着の男

青い海に青く広がった大空…目前には白く聳(そび)える煌びやかな校舎と近代的な街造り…

そして、時折頬を撫でる爽やかな風…うむ。良い街だ。

さて…――――――

――――何故私はここにいるのだろう…ｏｒｚ

ここは【ＩＳ(アイエス)操縦者育成特殊国立高等学校】…通称『ＩＳ学園』『例外』を除いて全校生徒や教師がほぼ女性という――ＩＳについては後述――トンデモ＆マンモス校なのだ。

さて、私…つまり『例外』である『男』の私が何故ここに居るかと言うと……

我が師であり、憧れであり、畏怖の存在…『篠ノ之（しのの）束（たばね）』の突飛な行動のせいである。

呆れて、ほんっっっっっの少し恨みを持っているが…それと同時に感謝もしている。

退屈な日常を一気に覆した『ＩＳ』…『インフィニット・ストラトス』の存在との出会い。

他、色々経緯があるのだが、今は語らずいるとしよう。

さて、早く行かねば織斑千冬に怒られかねん。

行くとするか…

流れに身を任せ、私…『緒方（おがた）　双葉（ふたば）』は進む。

（そういえばシャルは元気にしているだろうか？）

|1st end...

ＣＯＤＥ．００　到着の男（後書き）

次回はいよいよ原作主人公登場です！！

ＣＯＤＥ．０１　私はよく女っぽいと言われるが一応男だ（前書き）

連投だっぜ！

原作主人公登場！

意外な人（人…？）の登場も？

ＣＯＤＥ．０１　私はよく女っぽいと言われるが一応男だ

―校舎内、廊下…主人公．ｖｅｒ

ふむ…ここか。
ノックしてもしも～し…っと。

「失礼します。本日都合上遅れてきた緒方ですが…織斑教諭は…」

「ああ、私だ」

おっと、直ぐに見える位置だったか。
私の目の前にやってきたのは、我が師で（以下略）の束師匠の友人、
『織斑千冬』教諭である。
…そういえばオリムラか。
極最近に何処かで聞いたような。

「アイツから聞いている。知っていると思うが、織斑千冬だ」

「こちらも改めて、緒方双葉です」

自己紹介と握手を終え、目的の教室へ向かう。

「…緒方、一応聞くが…」

「言われずとも分かります。生物学上は男ですよ私は」
「分かっている。ただ確認をな…
この顔で男とは色々卑怯だろう…（ボソッ」

何か聞こえたが、あえてスルーするとしよう…うん。そうしたい…

「着いたぞ、呼んだ時に入ってくれれば良い」
「了解です」

そう言って織斑教諭は教室へと入って行った。

今のうちに『コイツ』に最終チェックを終わらせておくか。

「ＡＤＡ（エイダ）、ＩＳの最終チェックを頼むぞ」
《了解しました》

ああ、そういえば言い忘れていたな。
私は所謂『転生者』という奴だ。
…私の前世、と言っていいのか…極普通の一般家庭の極普通の面白みも無い男だった。
漫画もアニメも余り見ない。

ゲームは本当に気に入った物しかやらなかった。

その中で楽しいと感じたのは『ＡＮＵＢＩＳ―Ｚ．Ｏ．Ｅ―』だった。

ＡＤＡは戦闘のナビはもちろん、会話の相手としても申し分なかった。

そう思いながら過ごす高校生活の中…家で寝ていると、『神』というトチ狂った男が現れてこう言った。

―その考えと、それを再現できる世界を、見てみないか？―

私は迷わず食い付いた。

私が神に願ったのは『ＡＤＡを作れるほどの知識』、『その世界に見合った上級レベルの知恵と技能』だ。

神に「無欲だな」と苦笑いさせられたが、何故かおまけが追加された。

おまけで追加されたのが『その世界に見合った身体能力の向上』と『それなりの黄金律（自身に金の集まる具合の能力らしい）』である。

そして、この世界で一般家庭に生まれて両親が死に、公園で空を眺

めているところを束師匠に誘か…ゲフンゲフン！拾われて、ＡＤＡと私専用のＩＳを得て、今に至ると言うわけだ。

「よし、入れ！」

そろそろお呼びが掛かったようだ。最終チェックは後で報告してもらうか。

「失礼する」

そして私は教室へと入り、織斑教諭の隣に立つ。

「一身上の都合で遅れていた、お前たちの同級生だ」

「緒方双葉。私がここにいる以上解るとは思うが、男の身でありながらＩＳが扱える。ついでに言うと科学者でもある…至らないこともあろうが、よろしく頼む」

不安半分、期待半分の沈黙が続く。

すると…

「「「「「キャアァァァァァァァァァァァァァァァァッッッッ!!!!!」」」」」

耳を劈(つんざ)くような黄色い歓声だった。

『うわー！すっごいカッコイイ！』

『切れ長の目にミステリアスさを含む、その瞳…嫌いじゃないわ！』

『私で実験してェー！』

矢継ぎ早に続く女子たちのざわめきに、少し戸惑う私。
何時の時代や世界でも女子が元気なのは一緒なのか…！
…それに最後の女子よ、どうなっても知らんぞ？色々と。

そして、目の前『のみ』にいる『唯一の男子』に目を向ける。
やはりそうか。
織斑教諭と『この』織斑は姉弟か。

「入試試験会場以来だな。織斑一夏(いちか)」

「あ、えっと…緒方だっけ？」

「うむ。覚えていたようだな。ＩＳ学園でたった二人の男同士だ…
仲良くしていこうぞ」

「ああ。よろしくな緒方」

「名前で良い。自分以外の男のＩＳ操縦者のデータも欲しいところだしな…その点の協力も頼むぞ？一夏」

「う…その言葉に不安を禁じえないが、よろしく。双葉」

他愛も無い会話をしていると、周囲からの話し声が聞こえてきた。

『こ、これは…！』

『どうして…？どうしてここまで絵になるの！？』

『双葉×一夏ね…無論攻めは』

最後の奴の発言はこれ以上聞いて堪るかッ！（汗

「喧しい！」

――スパンッ！スパンッ！――

何時までもＳＨＲ中に話していたのが悪いのか、織斑教諭の出席簿攻撃を食らった。

な、なかなか痛いな…

「フン、まぁいい。それではこれにてＳＨＲを終了する。
諸君らはこれからＩＳについての基本的知識を半月で覚えて貰う。
その後は実習だが、基本動作は半月で覚えろ。いいか？いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ…私の言葉には返事をしろ」

…ＩＳ学園は軍隊なのか？と言いたくなるほどの織斑教諭の教官っぷりには驚いた。

その後、しばらくは超大人数の女子の視線には耐え難い何かが有った事をここに追記しておく。

―２ｎｄ　ｅｎｄ．．．

ＣＯＤＥ．０１　私はよく女っぽいと言われるが一応男だ（後書き）

初のＡＩ萌え筆頭…ＡＤＡ（エイダ）さんです。
ついでに言うとＩＳはジェフティーじゃないよ！

次回は主人公の師の妹とイギリス代表候補生が登場です。

ＣＯＤＥ．０２　代表候補生と激しいギャップ（前書き）

双葉「師匠の妹が出るといったな・・・あれは嘘だ」

月詠「おい」

ＣＯＤＥ．０２　代表候補生と激しいギャップ

ＩＳ学園…
アラスカ条約によって日本に設置されたＩＳ操縦者育成用の特別国立高等学校だ。
無論、ＩＳに関する人材は全てこの学園で育成される。また、学園の土地は、あらゆる国家機関に属さず干渉されない。
そのため他国ＩＳとの比較や新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されているのだ。
む？何故今更ＩＳ学園の説明をしているか？
それは私の周囲が少し落ち着いたからだ。

「――――であるからして、ＩＳの基本的な運用は国家の認証が必要であり、枠内の逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――――」

山田教諭の授業は順調に進む中、右隣の一夏の様子がおかしい事に気付く。
一夏は教科書を穴が開くほど、じ～～～～～～っと見ていたのだ。
もしやと思い、人間にギリギリ聞こえるくらいの小さな声で一夏に訊ねた。

「一夏」

「う…ふ、双葉ぁ……」

「……やはり貴様…」

「ああ、さっっっっぱり解(わか)らん」

想像の通りであった。
この阿呆(あほう)、どうせあの参考書を『古い電話帳と間違えて捨てました！』とかほざくだろうな。

「織斑くん、何処か解らないところはありますか？」

山田教諭も一夏の様子に気付いたようだ。
しかし山田教諭、君は呆けることになるぞ…

「えっと…いいですか」

「はい、解らない時のために先生はいるのですよ」

ああ、哀れ子羊(やまだきょうゆ)よ。
君は衝撃を受けることだろう…

「全　部　解　り　ま　せ　ん」

「――――――え゛」

ほらな。
予想外のバカ回答に固まった山田教諭の代わりに、織斑教諭が問いを投げた。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「織斑教諭。どうせ『古い電話帳と間違えて捨てました！』と…」

「何　故　分　か　っ　た　！」

―スパンッ！
―シパンッ！

一夏の阿呆発言に、織斑教諭必殺宝具『万物治める必中の簿帳』《しゅっせきぼ》と、量子化していた私の『阿呆許さぬ必当の張扇』《つっこみはりせん》が火を噴いた。

「もしやと想像した結果と同じとは…貴様は阿呆か？阿呆なのか？阿呆なんだな？」

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

「うぉぉぉ…出席簿に加え、まさかのハリセン―――」

―スパンッ！
―シパンッ！

「「返事はどうした？」」

「――――――すみません」

なんだろうな。織斑教諭とは気が合いそうだ。

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな？」

「い、いや…一週間であの厚さはちょっと……」

「や　れ　と言っている」

「……はい、やります」

「大丈夫だぞ、一夏」

「ふ、双葉…？」

「覚えたくなくとも覚えられるようにしてやろう…（黒嘲笑」

■　■　■　■

お固い授業を終え、一息ついたら、唯一の男同(いちか)級生が幼馴染らしき女生徒に連行され、ライオン(女生徒)の群れの中に放り込まれた孤独なトムソンガゼル(自分)で一難去ってまた一難…神というのは俺が嫌いなのか！？くっ…一夏め、有ること無いこと噂を流してくれる！（バリｂ（ｒｙ

（やめて！）

何か幻聴が聞こえた気がしたが気のせいだ！
今はミステリー小説を読んで誤魔化しているが、背中は冷や汗でいっぱいである。
ええい！早く戻って来い！このままでは私は心労死してしまう！

「ちょっとよろしくて？」

心中で焦っていると、金髪の女生徒が声を掛けてきた。
確か…

「ミスオルコットか…しがない一生徒の私に、エリートの代表候補生が何用ですかな？」

何？挑発の様にしか聞こえない？
残念、これが私の口調だ。

「…少し引っ掛かりが気になる所ですが、それなりの受け答えはできる様ですのね…ミスタ緒方」

「お褒めに預かり恐悦至極…っと失礼」

片方の手で口を抑え、もう片方の手で『待った』の形にする。

「…くちっ！

……失敬。鼻がムズムズしたもので…」

目線をミスオルコットに戻すと、彼女は口元を抑えて明日の方向へ顔を向けて視線を逸らし、ふるふると震えていた。

…くしゃみ一つでそこまで笑う事なかろうに。

「私のくしゃみはそんなに可笑しかったか…」

自分でもわかるぐらい落ち込む…

それを感じ取ったミスオルコットは慌てて訂正してきた。

「あ、いや、別に可笑しいわけじゃありませんのよ！？ただ…」

「そうか…？可笑しいわけじゃないのか？」

「え、ええ。そうですのよ。可笑しくなんかありませんわ」

柔らかい笑顔で訂正するミスオルコット。

そうか…可笑しくなかったか！

「落ち着きましたか？ミスタ緒方」

「うむ、ありがとう！」

感謝は笑顔でせよ。
ＡＤＡの教えだ。

「はぁう！…だ、代表候補生として当然の事をしたまでですわ！」

何故か顔を真っ赤に染めながら胸を張るミスオルコット。
…リンゴ病か？

「…ってそういう話ではなく……」

ミスオルコットが話を戻そうとするが、予鈴に阻まれてしまう。

「あ……ぐっ、次の休み時間にまた来ますわ！」

そうプンスカと怒りながらミスオルコットは自分の席へ戻って行った。

……何がしたかったのだ？

■　■　■　■

?セシリアＳｉｄｅ

わたくしはセシリア・オルコット。
イギリスの代表候補生である。

わたくしは男が嫌いである。
…いや、ノーマルより百合というわけでもなく、情けない男が嫌いなのだ。

その理由と言うのが幼少時代に遡る事となる。

わたくしの母は、心身共に強い女(ひと)だった。

強く、美しく、優しい…わたくしの理想像であり、目標だった。

それに対して、わたくしの父は婿養子だったからか、その姿を見る度いつも母に頭を下げていた。
それに追い討ちをかける様に、世界にＩＳが発表され、女尊男卑に傾きかけると『それ』は悪化した。

そのせいもあってか、夫婦仲の溝が大きくなり、笑い合うことなど殆ど無かった。
しかし、その二人が、二人揃って・・・死体となって帰って来た。
それからと言うもの、金の亡者が集(たか)ってきた。
しかし私(わたくし)はめげず、ＩＳに血の滲む様な努力を注いできた。
そして、高いＩＳ適正と【青き雫(ブルー・ティアーズ)】をこの手に収めた。

そして・・・今私(わたくし)は、あのＩＳ学園にいるの。しかし・・・

「織斑教諭。どうせ『古い電話帳と間違えて捨てました！』と…」

「何　故　分　か　っ　た　！」

そう、ＩＳ学園にこの男二人がいるということ！！

前者は、あの篠ノ之束を師とし、恐らく実質上「世界初の男性ＩＳ操縦者」である男・・・【緒方双葉】
後者は第一回モンド・グロッソの総合優勝および格闘部門優勝者、【ブリュンヒルデ】と名高い織斑千冬の実弟である【織斑一夏】。

・・・で、あるのに・・・・！
なんだろうか、このおバカ丸出しの会話は！！

・・・もう我慢ならない！

〜〜休み時間〜〜

「ちょっとよろしくて？」
私は織斑一夏に話し掛ける・・・つもりだったが、別の女性とに連れて行かれてしまった為、緒方双葉の方に近付いて声を掛ける。
「ミスオルコットか…しがない一生徒の私に、エリートの代表候補生が何用ですかな？」

・・・一応礼儀を弁えた受け答えは出来るらしい。
しかしどうにも挑発がかって聞こえてしまう。・・・落ち着いて、私！

「…少し引っ掛かりが気になる所ですが、それなりの受け答えはできる様ですのね…ミスタ緒方」

「お褒めに預かり恐悦至極…っと失礼」

彼は片方の手で口を抑え、もう片方の手で『待った』の形にした。
一体何を・・・・・・・・・

「…くちっ！
……失敬。鼻がムズムズしたもので…」

・・・はっ！あまりにも可愛いくしゃみにギャップを感じて意識が・・・うう、軽く鼻血が・・・

「私のくしゃみはそんなに可笑しかったか…」

彼はこれでもかと言うほどに落ち込んだ。
私は急いで（慌てて、とも言う）訂正した。

「あ、いや、別に可笑しいわけじゃありませんのよ！？ただ…」

「そうか…？可笑しいわけじゃないのか？」

「え、ええ。そうですのよ。可笑しくなんかありませんわ」

とりあえず危機は脱したようで。
外見上冷静な彼が子どもの様な反応を見せるのは予想外だった・・・

「落ち着きましたか？ミスタ緒方」

「うむ、ありがとう！」

そう言って、まるで向日葵のような明るい笑顔でお礼を言ってくる
ミスタ緒方・・・
狙っては・・・いないでしょうね。天然？

「はぁう！…だ、代表候補生として当然の事をしたまでですわ！」

思わず声が上ずってしまいました・・・
うぅ・・・自分でも解るぐらいに顔が熱い・・・

「…ってそういう話ではなく……」

私は正気を取り戻し、話を戻そうとするが、運悪く予鈴に阻まれてしまう。

「あ……ぐっ、次の休み時間にまた来ますわ！」

うぐぐ・・・このセシリア・オルコットを赤面させたことを後悔させてあげますわ！！

覚えてなさい、緒方双葉！！

「ちょっと待て！私の出番があるんじゃなかったのか！？」

「？　何言ってんだ箒」

「お前だけずるいぞ一夏！私は名前だけしか出てないぞ！いいのか！お！」

―３ｒｄ　ｅｎｄ．．．

ＣＯＤＥ．０２　代表候補生と激しいギャップ（後書き）

セシリアサイドでセシリアの脳内口調については・・・

「～～だが」＝冷静

「～～ですわ」＝混乱による素

です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9094r/

IS〜インフィニット・ストラトス〜 流れに身を任せるマッドな男！

2011年10月7日00時42分発行